

# 毎日地球未来賞 応募受け付け

## 次代へ向けたスマート農業

クボタは、ICT(情報通信技術)やIoT(モノのインターネット)を活用して、次世代スマート農業を実現する製品を開発している。

GPS(全地球測位システム)の位置情報に基づいて自動運転する田植え機を2016年に発売。直線に苗を植える技術は熟練しないと難しいが、これを自動化した。17年に発売した自動運転トラクターは、田んぼの位置や形状を事前に登録すればリモコン操作で耕すことができ、人間はその間に別の作業もできる。カメラも取り付け、人や障害物を検知すると自動で止まる。

18年末には自動運転の「アグリロボコンバイン」も発売予定だ。最適経路を自動走行するだけでなく、稲を刈り取る際の高さ調整も自動化。たまったモミがタンクで満杯になるのを予測し、設定した排出地点まで自動で移動する機能も搭載する。

## 自動田植えでラクラク

農林水産省によると、農業就業人口の平均年齢は66.7歳(17年時点)。スマート農業に関する製品開発は、高齢化する担い手の負担を軽減する狙いがある。また、自動運転の導入によって経験の浅い若手や兼業農家も農機を扱いやすくなり、営農規模の拡大や農作物の品質向上を支援したいとしている。

農家支援の一環として、消費量の減少傾向が続く米を加工した新たな食材「玄米ペースト」の普及にも力を入れている。小麦粉の代わりとしてパン生地などに使える。グループの中九州クボタ(熊本県大津町)が出資する企業が4年前から玄米ペーストで作ったパンやパスタを製造しており、熊本県内の実店舗やインターネットでの販売が好評を得ていた。今年6月には、玄米のペーストで作ったパスタやパンケーキを提供するレストランを東京・渋谷に出店。栄養価の高さは知られているが、和食の食材と考えられがちな玄米のイメージを変え、新たな需要を生み出したいとしている。

【加藤美穂子】

### クボタ

クボタは「食料・水・環境」の3分野で世界規模の社会貢献を目指している。毎日地球未来賞への協賛を続ける理由について、久保俊裕副社長に聞いた。

—毎日地球未来賞への応援をどのような思いで続けていますか。  
◆若い世代を対象とした次世代応援賞を2013年度、奨励賞を15年度に設けて大学生、高校生からの応募が増えています。災害は起きてほしくないですが、若者の活動は東日本大震災後に特に盛んになったと感じています。以前は国際交流への取り組みが目立っていた活動も、被災地だけではなく過疎地など自分たちが住む地域を元気にしようという草の根的な形に変わってきました。賞が刺激となって、活動の継続や新たな活動の基盤につながればいいと思っています。



### 久保俊裕 副社長

—賞を通して、受賞者同士の交流も増えました。  
◆東日本大震災の津波に襲われた岩手県陸前高田市で津波到達地点に桜を植える「桜ライン311」(17年度のクボタ賞)の活動では、徳島県の高校生団体「緑のリサイクルン」(17年度の奨励賞)が河川敷の刈り草から作った肥料を使っています。その肥料はクボタ本社内の農園でも使われ、そこで育った野菜は社員食

—賞を通して、受賞者同士の交流も増えました。  
◆東日本大震災から7年半がたち、一昨年は熊本地震、今年は西日本豪雨が起きました。  
◆東北の被災地には仕事などで毎年訪れていますが、復興には時間がかかると感じています。一方で新たな災害も起きています。毎年、東日本大震災の復興を支援する団体に受賞枠を設けていますが、今後は賞の対象範囲の拡大も必要ではないかと考えています。また、受賞パーティーだけでなく、インターネット上でも交流や情報交換の場を作ることができたらいいですね。ソーシャル・ネットワーキング・サービス(SNS)に専用ページを作って、国内はもちろん国際的にもつながりが広がれば理想的です。  
【聞き手・加藤美穂子、写真・小松雄介】

食料、水、環境の問題解決に取り組む市民団体や若者の活動を表彰し応援する「第8回毎日地球未来賞」(毎日新聞社主催、クボタ協賛)の応募を受け付けている。地道な活動を知って、みんなが行動を起こすきっかけになることも期待している。応募の締め切りは10月1日。

## 昨年度受賞団体が交流



①岩手県陸前高田市で桜を植樹する地元の高校生—桜ライン311提供②岩手県陸前高田市に送るため、作った堆肥を袋詰めする徳島県立新野高校の生徒—徳島県阿南市で、山田毅撮影

## 津波忘れられない 170キロの桜道

昨年度、クボタ賞を受賞したNPO法人「桜ライン311」(岩手県陸前高田市)は東日本大震災の被害を次世代に語り継ぐため、チームは徳島県の高校生有志の

クボタ賞 岩手・陸前高田のNPO 奨励賞 徳島の高校生有志



団体で、刈り草から堆肥を作る活動を続けている。両団体は受賞を機に交流を始め、堆肥を桜の植樹に使う新しい試みが生まれた。桜ライン311は2011年10月、震災で甚大な津波被害を受けた陸前高田市で発足。市内の津波到達地点に10日間隔で桜を植えており、総延長は約170キロ。20年

で1万7000本を植える計画だ。市内の学生や全国からボランティアを募り、これまでに284カ所に1420本の桜を植えた。岡本翔馬代表理事(35)は「過去の津波被害の教訓を生かせなかった悔しさを繰り返さないようにしたい」と話す。

焼却処分されていた公園などの刈り草から堆肥を作るのは、徳島県立新野高校(同県阿南市)など4校の高校生有志だ。堆肥の名前は「もったいない2号」。保水性や通気性に優れ、土を軟らかくする土壌改良材としての効果も高い。刈り草を発酵・分解させる微生物を探るためさまざまな場所の落ち葉を拾い集め、米ぬかを加えて実験を重ね、商品化にこぎ着けた。

両団体は今年2月、毎日地球未来賞の表彰式で出会い、堆肥を植樹に生かす活動が始まった。徳島の高校生は今秋も堆肥を送り、さらに初めて現地を訪れ、植樹作業を手伝う予定だ。新野高3年の山本梨乃さん(18)は「徳島ではなかなか東北の復興活動に関われないので、役に立てるのがうれしい」と話す。

【山田毅】

## 10月1日締め切り

対象 食料、水、環境の分野で国内外の問題解決に取り組む、主に市民・草の根レベルや生徒・学生などの活動が対象です。活動内容が複数分野でも1分野でも応募できます。東日本大震災の被災地、被災者に対するこれらの分野での復興支援活動も対象です。

若い人の活動は全ての賞の対象です。特に、次世代応援賞と奨励賞は、若い人の活動だけが対象です。自薦、他薦共に受け付けます。

▽毎日地球未来賞1点—賞金150万円▽クボタ賞(特別賞)2点—賞金100万円※以上3点のうち1点以上は震災復興関連▽次世代応援賞1点

—賞金50万円▽奨励賞2点—賞金25万円

賞金は、受賞した活動の継続、発展のために使ってください。

選考委員 ◆選考委員長◆沖大幹—東京大学生産技術研究所教授◆選考委員◆横山光弘—元国連食糧農業機関日本事務所長▽清水国明—タレント▽久保俊裕—クボタ代表取締役副社長▽小笠原敦子—毎日新聞社大阪本社副代表

応募方法 詳細な応募方法や応募・推薦用紙入手は、毎日新聞社の同賞サイト (<https://www.mainichi.co.jp/event/aw/chikyumirai/>) をご覧ください。ダウンロードできない場合は毎日地球未来賞事務局(06・6346・8407、平日10~18時)に連絡してください。

応募用紙等送付先 ▽Eメール: chikyumirai@mainichi.co.jp ▽郵送: 〒530-8251 大阪市北区梅田3の4の5 毎日新聞社毎日地球未来賞係

締め切り 10月1日(月) 発表 2019年1月の毎日新聞紙上。2月16日(土)、大阪市北区の毎日新聞社オーバルホールで表彰式・記念講演会を開きます。

主催 毎日新聞社 後援 内閣府政策統括官(防災担当)、復興庁、外務省、厚生労働省、農林水産省、国土交通省、環境省 協賛 株式会社クボタ